

次韻江晦叔二首 其二

江晦叔こうかいしゆくに次韻す 北宋・蘇軾

建中靖国元年（一一〇二）六十六歳正月か二月、虔州けんしゅうで作る。

1 鐘鼓江南岸 しょうこ 鐘鼓江南の岸

2 歸來夢自驚 歸り来つて夢おのづか自ら驚く

3 浮雲時事改 浮雲時事改まり

4 孤月此心明 孤月此の心明かなり

5 雨已傾盆落 雨已に盆を傾けて落ち

6 詩仍翻水成 詩な仍ほ水ひるがえを翻して成る

7 二江争送客 二江争つて客を送り

8 木杪看橋横 木杪もくびょう 橋の横たわるを見る

【語釈】●江晦叔：江公著の字。桐廬とうろ（浙江省）の人。元祐六年（一一〇九二）、東披に

「江公著の吉州に知たるを送る」の詩がある。この年、虔州の知事として赴して来ていた。●浮雲時事改：中興間気集（卷上）にみえる杜誦の「長孫侍御を哭する詩」に

「流水生涯尽き、浮雲世事空し。」●孤月此心明：宋の王応麟は困学紀聞にこの聯を引いて、「披公 晩年、造たる所 深し矣」という。●仍：やはり。以前と同じように。●

二江：虔州（いまの江西省鞍県）の北で、章水と貢水とが合流する（大清一統志による）。謝眺が江祐、江祀の兄弟を、「二江の雙流を帯ぶと謂う可し」といった。●木

杪：杪はこずえ、木の細い枝。

漢詩大系近藤光男より抄出

なつかしい江南地帯の岸边にひびく鐘鼓の声、夢破られたその瞬間、ああ帰って来ていたのだったと、はつと我に帰る。大空をすぎゆく浮雲さながらに、世の転変ははてしないが、その空中にひとりさえわたる月輪のごとく、いまのわたくしのころは澄明である。雨はさきほどから盆の水を傾けたようにふりしきっており、その中でわたくしの詩も、以前とかわりなく水をくつがえすようにさつとできあがる。章水・貢水ふたつの川が先を争ってたぎり流れ、中原にかえる旅をつづけるわたくしを送ってくれている。ふと見あげた崖の上、こずえしずかに横たわるかけ橋…。